

# 短期大学生の英語力の動向

中島 直樹

## 1. はじめに

平成 26 年 4 月、城西短期大学において英語力調査が実施され、外国人留学生を除く 66 名の短期大学ビジネス総合学科新入生が受験した。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。短大入学生の英語力低下の傾向は年々顕著になり、特に優秀な学生の入学も以前に比べると少なくなった。それに加えて、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかをあらかじめ認識しておくことがより必要になった。このような観点から、本学では新入生全員に対して毎年英語力調査を実施しており、その調査結果を基に、坂戸キャンパスの一年次の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B（日本人教員による TOEIC のリスニングとリーディングに重点を置いた授業）と TOEIC イングリッシュ I C・I D（外国人教員による授業）を能力別のクラス編成にし、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図っている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。それに加えて、12 月に本学で実施された TOEIC テストのスコアも比較・検討し、今年度新入生の英語力の新しい傾向を分析していきたい。

## 2. 過去 12 年間の英語力調査の結果を振り返って

はじめに、平成 14 年度の英語力調査から振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は 1 時間、全 50 問で 100 点満点の試験であった。93 名が受験し、全体の平均点は約 56.9 点であった。学科別の受験者数と平均点は表 1 の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現 代 文 化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

実際の得点分布を見てみると、かなり大きな広がりを持っていたことが分かる。90点以上のかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層（26名）と45点から59点までの中位の層（24名）と30点から44点までの下位の層（20名）とにおおよそ分類でき、この3つの層が平成14年度的女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、平成15年度の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現 代 文 化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

平成14年度の英語力調査の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がった。また、この年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高い結果となった。

得点分布グラフの形にもある程度の変化が見られた。14年度と違う点は、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（14年度は6名）ことと、中間層の領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの中間層にはいくつかの山があることが14年度の英語力調査の検証で分かっていた。そして、14年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移っていた。

次に、平成16年度の結果について検討したい。43名の新入生が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 平成16年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現代文化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

平成15年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がった。平成14年度から年々下降の一途をたどっていて、短大に入学してくる学生の英語基礎力が年々低下していることを如実に示す結果となっていた。

全体の得点分布は基本的には15年度とそれほど変わっておらず、15年度をほぼ継承していた。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなったことも、中間層の形が逆転したことも15年度と同様であった。それに加えて、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が5名となり、前年より3名減少してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいた。平成14年度には、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、平成15年度から中下位に比重が移り、その傾向は平成16年度も続いていた。

次に、平成17年度の結果について検討したい。80名が受験し、全体の平均点は約56.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表4の通りである。

表4 平成17年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	57名	約56.9点
現代文化	23名	約55.5点
全 体	80名	約56.5点

前年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては6.4点、現代文化学科においては5.1点、短大全体では6.0点上昇した。平成12年度から短大入学生の英語力調査のデータを探っているが、前の年の平均点を上回ったのは初めてのことであった。平成17年度は、奨学金制度が充実していたため、高等学校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、基礎学力を持って入学した新入生たちが平均点を押し上げた。数値的に見て、平成14年度の水準まで上昇した結果となった。全体の得点分布を見ても、短大全体では6.0点も平均点が上昇したので、まったく異なった形になった。90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかったが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名おり、この層が本学を引っ張る牽引車的な存在になっていた。受験者数が80名なので、約4人に1人がここに属していたことになり、この年度の躍

進を支えた原動力のひとつになっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が6名いたが、この割合は16年度とほぼ同じであった。30点から74点までの中間層は55名であった。この中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に18名、45点から59点までの中位の層に16名、30点から44点までの下位の層に21名の学生がいた。16年度は、得点層が下位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、17年度はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。平成15年度から中下位に比重が移ってきていて、平均点を下げる最大の理由となっていたが、17年度になってようやくその流れが変わった。

次に、平成18年度の結果について検討したい。82名が受験し、全体の平均点は約48.3点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表5である。

表5 平成18年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	82名	約48.3点

この年度に経営情報実務学科と現代文化学科が統合されてビジネス総合学科が誕生した。新学科になって初めての英語力調査であったが、17年度の平均点約56.5点から8.2点下落の約48.3点となった。17年度にいったん上昇に転じたが、18年度にまた大きく下げた。上昇の流れがわずか一年で途絶えてしまった。

全体の得点分布を見てみると、受験者数は前年とほぼ同数であったにもかかわらず、グラフの形は前年とまったく違うものになっていた。前年はどの層にもほぼ均等に数が分布していた。基礎力のない学生もいたが、基礎力のある学生もほぼ同数いた。特に、前年は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が19名もいて、この層が本学の全体的な底上げの役目を果たしていたが、18年度はその層には6名しかいなかった。ピークは40～44点のところであり、16名が集中していた。29点以下のほとんど基礎力のない学生が9名いたが、この層に関しては、前年の6名と大差がなかったと考えてよいであろう。90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなかったことも前年と同様であった。中間層の上位の層には15名おり、前年の18名とほとんど変わりはない。しかし、中位の層は前年の16名から7名増の23名、下位の層は21名から8名増の29名となっており、中間層の中でもとりわけ中下位の増加が目についた。つまり、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層が減少した分がここに集まっていたのである。前年度は奨学金制度が充実していた年度であり、高校の評定平均値3.5以上の学生が多く入学し、ある程度基礎力のある学生の層の中核となっていたが、18年度は奨学金制度の廃止に伴い、その層が激減し、代わりに中間層の中下位の学生が増えた。これが平均点を8.2点下げた最大の原因であった。

次に、平成19年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約51.0点で

あった。受験者数と平均点をまとめたものが表6である。

表6 平成19年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 51.0 点

ビジネス総合学科になって2回目の英語力調査であったが、前年度の平均点約48.3点から2.7点上昇の約51.0点となった。前年度と比べ、平均点が若干上昇したため得点分布グラフの形にわずかな変化が見られたが、特に大きな変化ではなかった。得点のより低い層により多くの学生が集中するというそれまでの傾向を継承していたと言ってよいであろう。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に12人、45点から59点までの中位の層に18人、30点から44点までの下位の層に22人となっており、やはり基礎力のない学生の多さが目立った。75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、前年の6名から11名に増加していた。18年度のピークは40～44点のところであったが、19年度は50～54点に移動しており、これらが19年度の英語力調査の明るい材料であった。

次に、平成20年度の結果について検討したい。受験者数81名、全体の平均点は約51.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表7である。

表7 平成20年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 51.0 点

受験者数は12名増加、平均点は前年とほぼ同じであった。だが、前年度と比べ、得点分布グラフの形はわずかに異なっていた。ピークは50～54点と40～44点のところにあり、いずれも10名。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層に15人、45点から59点までの中位の層に23人、30点から44点までの下位の層に22人となっており、中位の層が下位の層を1名ではあるが上回った。得点のより低い層により多くの学生が集中しやすい傾向は変わっていなかったが、中位の層が増加したことはよい材料であった。85～89点の層に5名、90点以上のかなり基礎力のある学生が2名いたことも喜ばしいことであったが、29点以下のほとんど基礎力のない学生が11名（前年は6名）おり、平均点が上がらない原因になっていた。かなりできる学生もいたが、それと同数のまったくできない学生もいて、平均すると前年並みであった。

次に、平成21年度の結果について検討したい。受験者数69名、全体の平均点は約46.0点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表8である。

表 8 平成 21 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	69 名	約 46.0 点

受験者数は 12 名減少、平均点は前年と比べ 5 点マイナスであった。得点分布グラフの形も当然異なっていた。前年度のピークは 50～54 点と 40～44 点のところ（いずれも 10 名）にあったが、21 年度は 30～34 点のところの下がってきており、12 名の学生がここにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40～44 点と 20～24 点にあり、低得点層の膨らみが目立った。30 点から 74 点までの中間層を見てみると、60 点から 74 点までの上位の層に 14 名、45 点から 59 点までの中位の層に 14 名、30 点から 44 点までの下位の層に 24 名となっており、やはり下位の層の占める割合がかなり多かった。29 点以下のほとんど基礎力のない学生も 12 名おり、前年と同様に、この層が平均点を大きく押し下げていた。90 点以上のかなり基礎力のある学生が 2 名（内 1 名は留学経験者）いたことが唯一の明るい材料であった。

次に、平成 22 年度の結果について検討したい。受験者数 81 名、全体の平均点は約 53.5 点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表 9 である。

表 9 平成 22 年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	81 名	約 53.5 点

受験者数は 12 名増加、平均点は前年と比べ 7.5 点上昇であった。前年と比べて平均点が大きく上昇した年は過去には平成 17 年度のみであったので、これが二度目ということになる。7.5 点の上昇は 17 年度の 6.0 点を上回っていた。平成 17 年度は奨学金制度が充実し、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。しかし 22 年度は 17 年度のような奨学金制度はなかったが、大きく平均点が上昇した。その原動力となったのが 3 月の入試で入学した学生達であった。彼らのほとんどが城西大学やその他 4 年制大学の受験に失敗し、第二希望で短大に入学した。一度は受験勉強をやった実績と短大卒業後に編入したいという気持ちを持ち合わせた彼らが平均点を押し上げたのだと思う。これまでの短大入学生はいわゆる受験というものを経験しないで入学することが多かった。そのような状況の中で、22 年度は受験に失敗した者たちが新しい風を吹かせてくれた。グラフの形を見てみると、前年度のピークは 30～34 点のところであり、12 名の学生がそこにいた。また、第 2 のピークもその前後の 40～44 点と 20～24 点にあり、低得点層の膨らみが目立っていた。それに対して、22 年度のピークは 50～54 点と 40～44 点のところへ上がってきていて、10 名の学生がここにいた。第 2 のピークは下方 30～34 点のところ（前年度のピーク）に 9 名いたが、70～74 点に 7 名、60～64 点に 6 名、両ピーク間の 45～49 点に 6

名おり、前年の下膨れした形とは明らかに異なっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は前年の12名から8名に減っていた。90点以上のかなり基礎力のある学生は4名おり、前年より2名増えていた。

次に、平成23年度の結果について見てみたい。57名が受験し、全体の平均点は約43.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表10である。

表10 平成23年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	57名	約43.7点

受験者数は24名減少、平均点は前年と比べ9.8点下落であった。受験者数は大幅減、平均点も調査を始めて以来過去最低、下げ幅も過去最大であった。前年に7.5点と大幅上昇し、23年度が注目されたが、このような残念な結果であった。過去に平均点が前年より大きく上昇した年度は17年度と22年度の二度であったが、いずれも翌年には大きく平均点を下げていた。特に23年度の下げ幅は大きく、18年度の8.2点下落を上回っていた。平成17年度は、奨学金制度が充実していた年度であり、多くの優秀な学生が入学して平均点が上昇した。また22年度は、4年制大学の受験に失敗して短大第二希望で入学した学生たちが、短大卒業後に4年制大学に編入したいと強く思い、また受験勉強をした経験を活かして平均点を押し上げた。このように考えてみると、17年度と22年度の二年だけが例外なのであって、当時の短大入学者の英語基礎力は年々著しく下がっていたと言わざるをえない。

得点分布グラフを見てみると、ピークは40～44点のところであり、12名の学生がここにいた。第2のピークは50～54点のところには8名いたが、1名少ない7名の学生が20～24点のところにいて第3のピークを形成していた。90点以上のかなり基礎力のある学生はいなくなり、最高点は86点、次点は78点であった。グラフの形も以前の下膨れした形にもどってしまった。39点以下の学生が20名もおり、それが全体の35パーセント以上を占めるという散々な結果であった。

次に、平成24年度の結果について見てみたい。54名が受験し、全体の平均点は約44.9点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表11である。

表11 平成24年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	54名	約44.9点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。前年の英語力調査で過去最低を記録し、24年度の結果が注目されたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同じ結果となった。

依然として短大始まって以来の過去最低水準であった。平均点が45点を下回った年は平成23年と24年の二年だけであり、いかにこの年の短大1・2年生に基礎学力が不足していたのかがよく分かる。得点分布グラフの形を見てみると、前年度と同様ピークは40～44点のところにあり、12名の学生がここにいた。30～34点に8名、50～54点に7名おり、これらが第2のピークを形成していた。第3のピークは65～69点と20～24点にあり、それぞれ6名の学生がいた。最高点は92点、次点は88点であり、その次はずっと下って74点であった。平成14年以来、30点から74点までの層を中間層としてきたが、24年度はその中間層以下が54名中52名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまった。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に21名となっていて、やはり下位の層ほど人数が多くなっていた。29点以下のほとんど基礎力のない学生は9名、90点以上のかなり基礎力のある学生は1名であった。

次に、平成25年度（昨年度）の結果について見てみたい。外国人留学生を除く51名が受験し、全体の平均点は約45.8点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表12である。

表12 平成25年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	51名	約45.8点

受験者数は3名減少、平均点は前年と比べ1.2点の上昇であった。過去二年続けて最低レベルに留まっていたが、受験者数も平均点も前年とほぼ同程度であった。これで三年連続45点前後というかつて経験したことのないほどの低い結果となった。グラフの形を見てみると、ピークは40～44点と30～34点のところにあり、それぞれ9名の学生がここにいた。第2のピークは55～59点にあり、7名の学生がいた。次いで、45～49点のところに6名、50～54点と35～39点のところにそれぞれ5名となっていた。30点から74点までの中間層を見てみると、60点から74点までの上位の層が激減してわずか3名、45点から59点までの中位の層に18名、30点から44点までの下位の層に23名となっていて、昨年度は特に中下位の比重が大きかった。中間層以下が51名中48名を占め、かつてはある程度存在していたそれ以上の層がほぼ消滅してしまったのは前年と同じであった。29点以下のほとんど基礎力のない学生は4名（前年は9名）に減っていたが、中間層上位の層も減っていたことで相殺され、前年と同程度の平均点となっていた。中間層中下位に特に多くの学生が集中していたという昨年度の傾向がよく見てとれる。残念ながら90点以上のかなり基礎力のある学生はひとりもいなかった。最高点は88点、次いで82点、80点、70点と続いていた。



### 3. 今年度の結果について

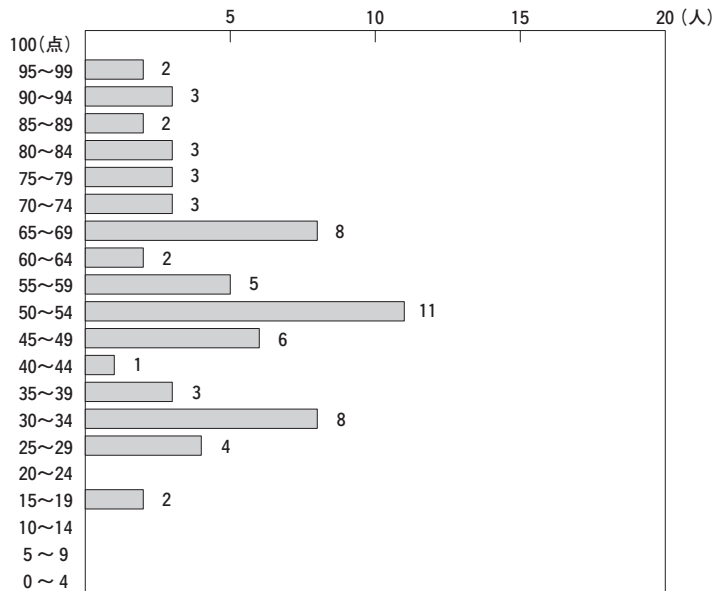
今年度もこれまでと同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は1時間、全50問で100点満点の試験とした。外国人留学生を除く66名が受験し、全体の平均点は約55.7点であった。受験者数と平均点をまとめたものが表13である。

表13 平成26年度英語力調査結果（4月実施）

学 科	受験者数	平均点
ビジネス総合	66名	約55.7点

受験者数は15名増加、平均点は昨年と比べ9.9点の上昇であった。過去三年続けて最低レベルに留まり、平均点45点前後という短大がかつて経験したことがない低レベルに悩まされていたが、今回一気に跳ね上がった。10点近い上昇というのは過去に例がない。なぜこのような結果になったのであろうか。まずは得点分布グラフを見てみたい。

平成26年度英語力調査結果得点分布グラフ（4月実施）



ピークは50～54点のところにあり、11名の学生がここにいる。その前後の55～59点に5名、45～49点に6名おり、大きな集団を形成している。ピークが10点上がっていることと、第2のピークがふたつあり、65～69点と30～34点のところにそれぞれ8名いることが今年の特徴であろう。昨年までは、ピークより下位の層の人数が上位の層よりも多く、グラフの形が下膨れしていたが、今年はそれが逆転している。30点から74点までの中間層を見てみても、60点から

74点までの上位の層に13名、45点から59点までの中位の層に22名、30点から44点までの下位の層に12名となっており、昨年が上位の層がわずか3名、下位の層が23名だったことを考えると、ここに今年の躍進ぶりがうかがえる。29点以下のほとんど基礎力のない学生は6名、90点以上のかなり基礎力のある学生は5名であった。今年度の入試では、一般入試（薬学部・理学部）の短大第二希望で入学した学生が16名（坂戸キャンパス12名、紀尾井町キャンパス4名）おり、もともと短大第一希望であった50名の学生との得点の比較をしてみた。短大第一希望者50名の平均点は51.1点であるのに対し、短大第二希望16名のそれは70.3点とずば抜けて高かった。90点以上の5名（内、紀尾井町キャンパス1名）はすべて第二希望者であった。このことから分かることは、今年度のもともとの短大希望の学生のレベルはここ数年の中では一番高く、更にレベルの高い短大第二希望者を加えて全体で昨年より平均点10点の伸びになったということである。短大第二希望者がレベルを引き上げた例は平成22年度にもあったが、当時は文系学部不合格の学生たちであり、数値的に見ても今回ほどの衝撃ではなかった。薬学部・理学部を不合格になったとはいえ、受験勉強を経験してきたということがこれほど基礎力確認テストの得点の差なって表れるのかということを改めて実感させられる結果であった。

#### 4. 問題の検証

次に、実際に出題された問題を検討し、正解率の高かった問題と低かった問題について特に気づいた点を検証していきたい。

まず、最も正解率の高かった問題は1番であり、正解率は84.8%であった。

(1) A: Do you know what language is ( ) in Mexico?

B: Yes. It's Spanish.

1. thrown            2. lent            3. spoken            4. told

次に正解率の高かった問題は10番であり、正解率は83.3%であった。

(10) A: I don't know ( ) Central Park is.

B: It's not far. I'll show you.

1. who            2. when            3. where            4. whose

次に正解率の高かった問題は42番であり、正解率は81.8%であった。

(42) どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where (① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice) coat?

1. \_⑥\_⑤\_ \_ 2. \_①\_④\_ \_ 3. \_②\_④\_ \_ 4. \_③\_⑤\_ \_

中学校で習う疑問文の基本的な形であるが、最低限の基礎力を問うために出題した。

次に正解率の高かった問題は2番であり、正解率は80.3%であった。

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office?

B : Sure. ( ) straight down the street. It's on the right.

1. Break                      2. Catch                      3. Go                      4. Put

正解率が80%を超えていたのは以上の4題であった。

反対に、最も正解率の低かった問題は26番であり、27.2%であった。

(26) Be kind ( ) old people on the train.

1. at                      2. to                      3. of                      4. from

6割以上が選択肢3を選んでいて、ここは毎年同様の傾向が見られる。

次に正解率の低かった問題は15番と34番であり、28.7%であった。

(15) I just bought a new swimming suit. Now I'm ready ( ) summer.

1. for                      2. along                      3. at                      4. on

7割以上が be ready for のイディオムを知らず、4割近くが選択肢4を選んでいて、

(34) It's a very busy airport. The planes arrive ( ) after another.

1. another                      2. one                      3. many                      4. fast

これも基本的なイディオムを問うために出題したが、正解率は低かった。毎年3を選ぶ学生が多い。

正解率が30%以下の問題は以上の4題であった。

1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。どの問題も短大で勉学を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題したが、昨年よりもかなりよくできていた。正解率80%以上が4題あったのはここ数年ではなかったと思う。しかし得点下位の学生は、基本的な文法・語法が弱く、中学校レベルでつまづいているという現状が明らかになっている。

## 5. 1月実施の英語力調査およびTOEICテストの結果について

これまで、4月に実施された英語力調査を基にして、今年度の学生の英語力を分析してきたが、1月の後期の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施し、どの程度スコアが伸びたかを調査した。第1回目(4月実施)と第2回目(1月実施)のテストの平均点と得点差をまとめたものが表14である。

表14 英語力調査結果比較

第1回目	第2回目	得点差
約55.7点	約58.4点	プラス2.7点

第2回目（1月）は63名が受験し、平均点は58.4点で、第1回目より2.7点上昇した。平成20年度以降の得点差推移を見てみると、20年度はプラス1.7点、21年度はプラス4.0点、22年度はプラス3.8点、23年度はプラス4.7点、24年度はプラス5.0点、25年度はプラス2.3点となっており、今年度のプラス2.7点はここ数年の中で低い上げ幅であり、満足できる数字ではないと思う。入学時の学力は高かったが、一年後にそれほど伸びていないと思われても仕方がない。しかし1月実施の英語力調査の得点分布グラフを見てみると違った側面も見えてくる。4月に22名いた中間層中位の層が1月には9名に減り、その代わりに、13名だった上位の層が20名に増えている。努力した学生が学力をつけて得点を伸ばしたことがよく分かる。しかし下位の層は12名から15名に増えており、平均点の伸びを鈍らせる原因になっている。中間層中位以上の層は学力の伸びが見られるのに対し、15名前後の中間層下位以下の学生が足を引っ張り、全体の伸びを抑え込んでいる。そういう意味では、また今年もやる気のあった学生とそうでなかった学生との差がはっきりとした一年であったと言えよう。

また、今年度も、12月に本学で実施された第4回TOEIC IPテストを受験するように指導し、短大1年生17名が受験した。全学との比較は表15の通りである。

表15 第4回TOEIC IPテスト結果

学 部	受験者数	平均点
短 大	19名	253.9点
全学（短大含む）	257名	279.6点

短大を含む全学で257名が受験し、平均点は279.6点であった。昨年同月の平均点が329.7点であったので、全学的に英語の学力が下がっているのが分かる。短大の平均点は253.9点であり、昨年の238.5点を15.4点上回っている。短大1年生の最高点は380点、300点以上の学生は3名であった。2年生の選択科目のインテンシブ・イングリッシュI・IIにおいて引き続き指導していきたい。

## 6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14年度：56.9点、15年度：54.5点、16年度：50.5点と年々下降の一途をたどり、17年度に56.5点といったん上昇に転じたが、18年度に48.3点と大きく下げ、19年度：51.0点、20年度も51.0点と戻したが、21年度は46.0点と下げ、22年度は53.5点と大きく上昇したが、23年度は43.7点（過去最低）、24年度は44.9点、25年度は45.8点、そして今年に55.7点と10点近く上昇した。平均点が大きく上昇した年度は、平

成 17 年度と 22 年度に続き三度目である。17 年度は、奨学金制度の充実に伴い、評定平均値の高い学生が多く入学して平均点が上がった。22 年度は、文系短大第二希望入学者など勉強意欲が高い学生が多く入学して得点を引き上げた。今回は、理系短大第二希望入学者 16 名が 70.3 点をたたき出し、平均点を大いに上げることに貢献してくれた。前年比約 10 点の上昇というのは初めてのことであった。短大第二希望者の陰に隠れがちだが、今年は、もともと短大を第一希望にして入学した学生の平均点も 51.1 点となっており、過去三年間続いた平均点 45 点前後の最低レベルの状態からは脱した感がある。一年後の試験では英語力の伸び方はさまざまであったが、残りの期間で更に力を伸ばせるように指導していきたい。